十一月十四日・十五日、大牟田において総評主婦の会主催による「秋季九州ブロック活動者会議」が開かれた。

各県評代表者二〇〇名によって十四日は①くらしのもんだい。②合理化のもんだい。③組織づくりのもんだい。④平和のもんだい」の四分科会にわかれて討議が深められた。各分科会ともそれぞれの実態が出された中での討議は、大きな成果がえられた。

夜は三池労組員宅に民泊し、交流を深めた。

十五日の全体会議では、分科会の報告のほか、三池からCO患者家族の代表が特別報告を行い、現在闘っているCO闘争と患者や家族の実態を訴えた。

この訴えに対し、全体会議はさっそく会場内カンパを行い四、〇七四円が集まり、闘っている患者や家族に対しては激励、関係各庁には抗議電をうち、炭労・総評・社会党にはCO問題に奮起するよう激電をうつことを決議した。

大きな成果をえた二日間の会議が終って、各県から民謡などを出しあった交流がもたれ、なごやかな雰囲気のうちに来年の再会を約して散会した。

創作劇 〝三池の子〟（解説）

大牟田南高校演劇部創作

六日筑後市の市民会館で開催された筑後地区高校演劇祭に、大牟田南高校の演劇部は自作の〝三池の子〟を上演して見事入選、近く行なわれる福岡県大会に再度上演することになったが、この創作劇が三池大変災の犠牲――CO患者をもつ家庭の一つをその題材にしている点にまず注目したい。しかもその上に、CO患者とその家族をこれほどの苦しみにつき落した根源の問題を、正しくつかんでいるきびしい目には、心をうたれずにはいられない。これはその劇のあらすじである。

○　○

▼…高校三年の陽子と、同じく一年の良一の姉弟の父はCO患者の一人で、福岡の某病院に入院治療をつづけている。

その父が外泊を許されて病院から帰ってくることになっていた。その日、陽子の担任の先生がたずねてきた。「陽子君の成績だったら、奨学資金も大丈夫もらえるから、大学にやって勉強させては…」ということだったが、陽子の母にすれば「特別立法もどうなるかわからず、陽子にも仂いてもらわんと…」というほかなかった。

そのうち父が帰ってきた。姉弟はそのため買っておいたバナナを父に与える。「お父さん、おいしい?」とのぞきこむ良一。

ふと思いがけなくも〝チョウダイ、チョウダイ〟をしている良一の手に、何思ったか父がバナナをやったではないか。ついぞいままでになかった父のその行為を、驚きよろこぶ三人の親子だった。

その姿を見ては大学進学をすすめにきた陽子の先生もさすがに「お母さん大変ですね。じゃ…」と帰っていかざるを得なかった。

その日うれしさかくし切れず、父をお風呂に誘った良一のふとした不注意がアダとなって、父が交通事故にあい死んでしまう。

「あのときもう少し注意していたら……」としきりになげく弟の良一を、陽子は「いいえ違う、そんなことはない」とはげましながら叫ぶのである――

「お父さんは、ガスにはねられたんだわ。もしもあのときすぐ救助隊さえはいっていたら、お父さんはあんなにならずにすんだはずよ。あのとき三池の他の二つのヤマの人たちは、三川鉱と坑道でつながっていたのに事故のことを知らされず、スミを掘らされていたんだわ。会社はなぜスミを掘る前に人間を助けなかったのだろう。お母さん、私はやっぱり大学にゆくわ。仂きながらでも、夜大学にゆける。お父さんばかりでなく、こんなに一生懸命仂いていながらなぜみんなの人が苦しい目にあうのか、私はそれが知りたいの」

○　○

こうしてこの劇は、感動の幕を閉じる。

三川青婦部の 〝追悼・生花展〟

三川青婦部では、例年おこなう「保安サボ犠牲者追悼生花展示会」を今年も行った。

今年は三年目を迎える十一月九日を前に、労基署よりの労災補償打切りに対して怒りと抗議の座り込みが続けられる中での、仲間の手によるこの生花展は、政府・三井鉱山の露骨な攻撃に対して闘う全組合員への励ましとなった。

生花に祈りと怒りを托して

随筆 「今日わー奥さん」

港務　柿坂　敏

日曜日の午後のことであった。玄関の戸が勢いよくあくと「こんちわー奥さん」と、いせいのよい来訪者の声がした。妻が応接に出ていった。玄関といっても、せまくるしい社宅のことで、フスマ越しに来訪者の声は、六畳の間で午前中の署名運動でつかれて横になっている私には筒抜けに聞こえてくる。「私は〇〇新聞の拡張員ですが、お宅は何新聞を購読しておられますか?」。妻は「朝日新聞を購読している」と答えた。

それからは定石どおり、立板に水流すごとく、強引にして、ネッチリとした〇〇新聞の宣伝と、売込みがはじまった。元来私は、新聞の拡張員というこの人種には好感がもてない。同じセールスマンでも、特権意識と官僚くさみをもっている。いつもなら、このへんでイライラしてきて腹立しさを感ずるのだが、今日の私は違っている。むしろ興味をおぼえ、聞き耳さえたてていた。それは午前中の署名運動で、嫌味をいわれたり、断わられたりして苦労した、わが身につまされての同情心と、いま一つこの拡張員の見事なる、技術と心臓を学ぼうとする心境からであった。

よくもああすんなりと「今日わー奥さん」ど他人の玄関があけられることに、まず第一番に感心する。私の署名運動で一番の難関はあの玄関の戸だ。運動の第一歩がまず、あの玄関の戸で急ブレーキをかけられる。心にムチ打ち戸をあけ、来訪を告げ、応接依頼の順になるが、あの面倒くさそうな態度、物もらいに接するような眼で見おろされると、針のムシロに座っているような嫌な気持になる。

これは運動に対する理解とか、熱意とかというものより、私の体質と神経の問題だろうと、自からをなぐさめたりしているが。その点、この拡張員なんか、長い経験の中できたえたものだろうが実に見事なものだ。妻との闘いはまだ続いている。「商業新聞なんて、何処の新聞も大同小異みんな同じですよう」と最後の切札のようになげると、妻は無言戦術にでた。

私は妻のこの言葉をきいて苦笑した。組合の情宣で覚えた言葉だろうが「商業新聞」という新語まで妻の口から飛び出すとは。しかしこのくらいの皮肉が通ずる相手ではない。「奥さん、何処の新聞も同じなら、新聞の購読料が三分の一ですむ経済的な方法を伝授しましょう。朝日、毎日、西日本、読売と三カ月毎に変えなさい。最初の一カ月はどこでも無料サービスするから、一年には三分の一得をすることになりますよ」と、とんでもないことを言いだした。

しかし、やりくりで苦労している妻にとっては、この言葉は魅力的だったらしい。「貴男の新聞も一カ月無料で、三カ月目にはやめていいのですか」と問うた。「それで結構です」と拡張員はすましたもの。まるでバナナのたたき売りだ。口を開けば、社会の公器だとか偉そうなことをいう新聞も、商業新聞のベースのからくりの中で存立するためには、商業道徳もへったくれもないものだ。こんな経営方針から出てくる報道に中立など求めるのが、どだい無理なことではないだろうか。

しかし、妻と拡張員との勝負はどうやらこれでけりがついたようだ。明日から多分、松本清張の連載小説の楽しみが、私からなくなることだろう。断わられたときよりセールスがはじまるという。セールスの金条と、断わられ時から運動がはじまるという、大きい教訓を残して。新聞をせんたくするという私の感傷など、煙草の煙のように消えていく。

（一九六六年十月）

俳句

四山支部　下川延雄

洗たくや日毎につのる妻のあじ
涼風の心ゆくまであじをかみ
一匹のまえしトンボ病窓に
柿をたべ子供の頃をなつかしむ
台風のしらせを聞いて戸じまりし
台風や人の心をおびやかし
療養の心なぐさめ別府園
神経痛初秋の雨に尚痛み
鶴見山初冬のごとく肌寒し

様モ奥メ

長ぐつに名前を書くとき

長ぐつ類に名前をつける時には、ペンキかエナメルがあればいいのですが、一般家庭ではちょっと無理かと思われます。そこで一般家庭でやるには、まず名を書きたいところをきれいにふいて、ゴムをいためないていどにその部分を火であたため、さめないうちに、クレオンで書くことです。黒いくつなら赤か白、あるいは黄色で書くとよく目立ちます。

高物価で家庭も不和
佐藤内閣はやめろ

〝日本人の五人に一人は貧乏〟――厚生省の四十年度国民生活実態調査の結論である。この調査は昨年五月に全国二万千六百四十世帯を選んでまとめたものだが、全体の二〇・九%が「このままでは暮らしていけない」「食べるのにせいいっぱい」と答えている。

物価は上がり放し

ことしになって配給米、私鉄運賃、地下鉄運賃、国鉄運賃、授業料、保険料、学校給食費、公団住宅家賃、郵便料…が続々値上げ。来年はまた配給米、たばこ、国立大学の授業料、学校給食費、清酒などの値上げが予定されている。国鉄労仂者が勤務を終えて深夜、国鉄駅員の身分をかくして国鉄の下請け仕事の雑役をして生計を支えている話もある。

大資本は――昭和二十六年から四十年まで十四年間の大企業の総資産（蓄積）増加率をみると、鉄鋼十八倍、造船十八倍、精密機械二十三倍、電気機械二十四倍、自動車三十六倍、全産業平均十五倍（戦前三・七倍）の〝成長ぶり〟

駅場は残業

駅場は増産体制でしめつけられ残業とスピードアップが労仂者の肩に重くのしかかっている。昨年八月、八百余人の帰休を実施、さらに首切りを強行した不二越では八月の残業時間が昨年十二月にくらべて約三倍。人員八%減に対し生産一九%増である。八幡製鉄でも九月からほとんどの工場がノンストップ生産。

労仂災害も激増した。石川島播磨重工ではことしすでに二十六人の労仂者が生命を奪われた。この数字は昨年同期の約二倍。労仂災害による死傷者は昨年一年間に届け出のあったものだけで六十九万五千人（死者六千百人）にのぼるほかに炭鉱爆発による死者が七百二十人いる。

おかずはつけ物

職業病も広がった。日本医学年鑑によるとこの七年間に病人は二倍にふえた。厚生省調査によれば成人一日の必要カロリー量（二・五〇〇カロリー）をとっていない世帯が五七・九%、人口五人に一人が医学的にみれば〝栄養不足〟だという。

さきごろ文部省が発表した体育白書は、小学校生徒のおかずで一番多いのはつけもの、と指摘している。いまこそ、怒りを佐藤内閣打倒へ!